

日産アートアワード2020

中国・武漢K11芸術村 滞在レポート

潘 逸舟

武漢は長江の中心にあり、川沿いのため古くから発展してきた歴史がある。多くの詩人や三国志の舞台ともなっている。何よりも 2020 年のコロナウィルスによって知ったという人も多いただろう。私は何度か海外でのレジデンスを経験しているが、中国でのレジデンス参加は初めてであった。それは戻るような感覚であり、また初めての場所に向かうような感覚でもあった。その混ざり合った両義性のある感覚が何であるのかを知りたかったと思い、武漢にある K11 のレジデンスに参加したいと考えた。渡航はギリギリまで調整していた。現地の人々に出会い、歴史や文化に触れながら、自分自身の表現とも向き合えた時間になったと感じている。

中国への入国は厳しく、上海に到着後3週間の隔離が要求され、その後武漢への移動となった。隔離ホテルでの滞在中は、毎日2回の検温と3,4日に1度のPCR検査。弁当はドアの前に配達され、ドアをノックしてくれる。ネット配達での食事注文は禁止だが、なぜか牛乳とフルーツのみは可能であった。タオルなどの備品は電話をすると新しいものを持ってきてくれた。しかしなんとも厳重な管理で、目に見えない存在に対しての人間の恐怖心そのものを、現実において可視化したような空間であった。そして私はすっかり忘れていたが、この期間は旧正月であった。外では毎晩花火が打ち上げられた。隔離滞在中は日記を書くかのように、毎日古い写真を絵にしている、この閉ざされた空間でイメージと向き合うことについて考える日々であった。また弁当の袋を使って、それらをライトに被せてランタンを作り、その光る様子を映像に記録した。

2月22日やっとのことで武漢に到着。想像していたよりもかなりの大都市であった。滞在中は寺や美術館の見学やトークをする予定であったが、2日目にして至る所で地域のロックダウンが始まった。全市民のPCR検査が実施され、博物館や寺など観光名所が閉ざされたのは残念であった。しかし友人やK11を通じて地元のアーティスト

たちと交流ができ、2020年の頃の話を知ったり、スタジオビジットして作品を拝見した。どの作品も自分達の生命を力強く表現していて、同じ表現者として勇気をもらえた。今後も引き続き交流したいと思う。そして滞在中ロシアがウクライナに侵攻したというニュースが流れ、私は毎日更新するはずだった SNS を少し躊躇してしまった。私たちは情報の中に生きていて、この状況ではそれが他者を想像する手段になっていた。悶々としながらひたすら街を散歩する日々が続いた。そんな中で「打豆腐」という楚劇に出会った。それはここ湖北省の伝統的なオペラで、京劇に肩を並べるほどであった。夫婦が新年を迎えるために大豆を買って豆腐を作るという物語である。しかし豆腐を買いに行った夫は、そのお金を酒やギャンブルに使ってしまい、帰りに大豆を買うお金がなかったため、大豆の代わりに砂を袋に入れてごまかそうとする話である。こんな些細な日常の物語に、私は生きていることの幸せを感じた。私はスタジオにあるライトに、買い物の袋を使ってまたランタンを作った。その光で楚劇「打豆腐」の映像作品を制作しようと考えたのである。

このレジデンスでは半分が隔離期間であったが、そのことも含めて今の社会について考える貴重な機会となったように思う。コロナ禍で海外レジデンスへの参加そのものがとても珍しいこととなる中で、実際に移動し出会い想像することは、表現することのエネルギーそのものであると今回の経験で感じた。まさに「知行合一」である。行動することによってのみ知れることや理解できることがたくさんあると確信した滞在であった。武漢を離れた今でも、まだ旅が続いているようである。

滞在期間: 2022年1月30日～3月15日

NISSAN ART AWARD



隔離中に古い写真を描く



アーティストスタジオビジット、地元の作家たちと交流の様子



K11 芸術村近辺の街の様子

NISSAN ART AWARD



1910~30 年代の建物



1985 年 武漢の美術家たち



作品制作